

# 脳死・臓器移植に対する看護学生の意識

— 2002年と1992年の調査結果と比較して —

真部 昌子<sup>1)</sup> 小濱 優子<sup>1)</sup> 赤坂 憲子<sup>1)</sup>

## 要 旨

脳死が概ね人の死とされ、件数は少ないが臓器移植が行われるようになった。筆者らは1992年に看護学生などに対して「脳死及び臓器移植に対する意識調査」を実施している。10年という歳月と現実に臓器移植が行われるようになった事実が、看護学生の意識に影響を及ぼしているのかどうかを調査した。その結果、脳死や臓器移植に対する学生の意識は1992年と同様に高いものの、調査結果に大きな変化はみられなかった。

キーワード：脳死、臓器移植、看護学生の意識、人称

## はじめに

臨時脳死及び臓器移植調査会（脳死臨調）が脳死は「概ね人の死である」という結論を出したのは1992年のことである。それから10年という歳月を経た。その間、国会で幾度か「臓器移植法案」が審議され、1997年6月「臓器の移植に関する法律」がようやく可決された。この法律は「脳死を人の死とするのは、臓器移植を前提とした場合に限り、本人が生前に、臓器提供意思はもちろん、脳死判定に従う旨の意思をも書面により表示しており、家族がこれを拒まない時に初めて、法に基づく脳死判定が行われ、脳死と判定された時に死亡したことになる」という法的な構成になっている<sup>1)</sup>。1997年10月臓器移植法が施行され、2002年10月現在で20例の臓器移植が行われている<sup>2)</sup>。

筆者らは1992年に看護学生及び一般学生に対して「脳死及び臓器移植に対する看護・保育・英文科学学生の意識」を実施し報告した<sup>3)</sup>。脳死臨調の答申から10年を経た今日、看護学生の「脳死に対する意識」がどのように変化しているのかを調査したのでここに報告したい。

## 研究方法

1) 「脳死に対する関心」「脳死をどのように考えるか」「脳死状態の人へのケア」「脳死臓器移植」「ドナーカードについて」など1992年度に実施し

たアンケートとほぼ同じ16項目からなるアンケート調査

2) 対象：K看護短期大学2年生79名と科目聴講の学生1名の計80名

3) 調査実施：2002年4月16日

4) 倫理的配慮：調査内容を説明し、同意の得られた学生からアンケートを回収した

## 調査結果

(1) 有効回答数 79 (99%)

(2) 基本的属性

性別：女性 76名、男性 3名

年代：10代 48名、20代 29名、30代 1名、40代 1名

(3) 「身近な人の死の体験」の有無

68名 (87%) の学生があると回答していた。うち「家族の死」を体験した者は60名 (88%)、友人の死を体験した者は18名 (30%) であった。

1992年度の調査では、「身近な人の死の体験」がある学生が98名 (79.0%) であった。

(4) 「脳死に対する関心度及び関心をもった理由」

(表1、2)

「関心がある」が66名 (83.5%) ともっとも多く、次いで「大いに関心がある」が6名 (7.5%) で、「関心のある」者の合計は72名 (91.1%) であった。また、「ほとんど関心がない」は3名、「全く関心がない」は1名で、「関心のない」者の合計は4名

1) 川崎市立看護短期大学

(5%)である。

関心のある学生の「関心をもった理由」については「新聞やテレビで話題」が39名(54.2%)、「家族と話し合うことがある」が32名(44.4%)、「将来脳死患者に遭遇する可能性がある」が31名(43.1%)、「学生間で話し合う」18名(25%)という結果であった。

脳死患者に接した体験のある者はいなかったが、「身近な人の脳死を体験した」者が2名いた。

1992年度の調査には「家族と話し合う」という項目は入れていないが、「将来脳死患者に遭遇する可能性がある」が86名(72.2%)、「新聞やテレビで話題だから」が81名(68.1%)という結果であった。

表1 脳死に対する関心度

回答項目	人 (%)	
	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
大に関心がある	22 (17.7)	6 (7.6)
関心がある	97 (78.2)	66 (83.5)
ほとんど関心がない	4 (3.2)	3 (3.8)
全く関心がない	0	1 (1.3)
わからない	1 (0.8)	3 (3.8)
計	124 (100)	79 (100)

表2 関心がある人の理由(複数回答有)

回答項目	人 (%)	
	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
脳死患者と接したことがある	1 (0.8)	0
身近な人の脳死を体験した	8 (6.7)	2 (1.5)
将来、脳死患者に遭遇する可能性があるか	86 (72.2)	31 (23.3)
新聞やテレビで話題だから	81 (68.1)	39 (29.3)
脳死について学生間で話し合うことがある	14 (11.8)	18 (13.5)
家族と話している	—	32 (24.1)
その他	16 (13.4)	11 (8.3)
計	119 (100)	133 (100)

(5)「脳死をどのように考えるか」(表3、4)

「わからない」28名(35.4%)、「生と死の間にある状態」27名(34.1%)、「人の死である」16名(20%)、「生きている人だ」6名(7.6%)という結果であった。

「脳死に対する考えの理由」

「何となく」25名(31.6%)、「新聞などを読んで」24名(30.3%)、「本を読んで」23名(29.1%)、「講義やゼミを通して」11名(13.9%)という結果であった。

1992年度の調査では、脳死は「生と死の間にある状態」が43名(34.7%)、「人の死である」36名(29.0%)、「わからない」26名(21.0%)、「生きている人だと思う」12名(9.7%)であった。

また、「脳死に対する考えの理由」は「テレビで脳死患者の実態を見て」が57名(46.0%)、「本や雑誌を読んで」と「講義やゼミを通して」が共に30名(24.2%)、「何となく」が13名(10.5%)であった。

尚、2002年度は理由を問う設問の中に「テレビで脳死患者の実態を見て」は入れていない。

表3 脳死に対する考え

回答項目	人 (%)	
	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
人の死だと思う	36 (29.0)	16 (20.3)
生と死の間	43 (34.7)	27 (34.2)
生きている人だと思う	12 (9.7)	6 (7.6)
わからない	26 (21.0)	28 (35.4)
その他	7 (5.6)	2 (2.5)
計	124 (100)	79 (100)

表4 脳死に対する回答の理由(複数回答有)

回答項目	人 (%)	
	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
脳死臨調の答申が出されたから	9 (7.3)	3 (2.9)
新聞の記事やアンケート結果を読んで	26 (21.0)	24 (23.1)
テレビで脳死患者の実態を見て	57 (46.0)	—
本や雑誌を読んで	30 (24.2)	23 (22.1)
今は人間の生死について特別に考えていない	0	1 (1.0)
講義やゼミを通して	30 (24.2)	11 (10.6)
何となく	13 (10.5)	25 (24.0)
その他	28 (22.6)	17 (16.3)
計	124 (100)	104 (100)

(6) 「脳死患者のケアをすると仮定して」

「体温があるのだから生きている人と同じようにケアしたい」が47名 (59.5%) でもっとも多く、次いで「言葉などで訴えられないのだから丁寧にケアしたい」が28名 (35.4%)、「死者なのだから事務的にケアしたい」「死者なのだからケアの必要はない」を選択した学生はいなかった。

この項目に関する1992年度の調査結果はない。

(7) 「脳死患者の家族にはどのように接したいか」

「ショックを受けているだろうからそれを緩和するように接したい」51名 (64.6%)、「臓器提供ということになったらそれを受け入れられるように接したい」19名 (24.1%)、「普通の患者の家族と同じように接したい」が11名 (13.9%) あった。

この項目に関する1992年度の調査結果はない。

(8) 「脳死臓器移植」に対する考え (表5、6)

「賛成」34名 (43.0%)、「わからない」22名 (27.8%)、「やむなく賛成」11名 (13.9%)、「するべきではない」2名 (2.5%)、「その他」が4名であった。

その理由として、「病気が治るのなら臓器を使うべき」32名 (29.4%)、「テレビを見て」23名 (21.1%)、「新聞を読んで」15名 (13.8%)、「本を読んで」14名 (12.8%) で、「脳死臨調の答申が出されたから」を選択した者はいなかった。また、この設問で「その他」を選択した者が25名 (22.9%) であった。

1992年度の調査結果は、「テレビを見て」が51名 (41.1%)、「病気が治るのなら臓器を使うべき」48名 (38.7%)、「その他」38名 (30.6%)、「本や雑誌を読んで」19名 (15.3%)、「新聞を読んで」14名 (11.3%) であった。

表5 臓器移植に対する考え

回答項目	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
積極的に賛成	7 ( 5.6)	5 ( 6.3)
賛成	38 (30.6)	34 (43.0)
やむを得なく賛成	27 (21.8)	11 (13.9)
するべきではない	10 ( 8.1)	2 ( 2.5)
わからない	26 (21.0)	22 (27.8)
その他	16 (12.9)	4 ( 5.1)
無回答	0	1 ( 1.3)
計	124 (100)	79 (100)

表6 臓器移植に対する考えの理由 (複数回答有) 人 (%)

回答項目	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
脳死臨調の答申が出されたから	3 ( 2.4)	0
新聞の記事やアンケート結果を読んで	14 (11.3)	15 (13.8)
テレビで脳死患者の実態を見て	51 (41.1)	23 (21.1)
本や雑誌を読んで	19 (15.3)	14 (12.8)
病気が治るなら臓器を使うべきだ	48 (38.7)	32 (29.4)
その他	38 (30.6)	25 (22.9)
無回答	6 ( 4.8)	0
計	124 (100)	109 (100)

(9) 「ドナーカードを持つかどうか」(表7-a)

「既に持っている」が15名 (19%)、「カードを持ちたい、登録したい」21名 (26.6%)、「したくない」11名 (13.9%)、「わからない」29名 (36.7%) であった。

また、「既に持っている」と回答した者全員が「常に携帯している」を選択しており、「既に持っている」「カードを持ちたい」と回答した36名のうち23名 (63.8%) の者が「ドナーカードについて家族と話し合っている」を選択し、4名 (11.1%) が「これから話し合いたい」を選択していた。

1992年度の調査結果では、「ドナーカードを既に持っている」という選択肢はない。また、当時は「登録する」という表現が用いられていたので選択肢にもそれに準じて作成した。「臓器登録への希望」は「登録したい」が58名 (46.8%)、「わからない」50名 (40.3%)、「登録したくない」15名 (12.1%) であった。

表7-a 臓器登録への希望

回答項目	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
ドナーカードを持っている (登録している)	—	15 (19.0)
登録したい	58 (46.8)	21 (26.6)
登録したくない	15 (12.1)	11 (13.9)
わからない	50 (40.3)	29 (36.7)
その他	1 ( 0.8)	3 ( 3.8)
計	124 (100)	79 (100)

(10)「ドナーになることを希望している家族が脳死になったら」(表7-b)

「本人の意思を尊重し、臓器の提供に応じる」42名(53.2%)、「本人の意思は理解できても、臓器の提供には応じられない」17名(21.5%)、「わからない」15名(19.0%)であった。

1992年度の調査では、「本人の意思を尊重し、臓器の提供に応じる」が89名(71.8%)、「わからない」24名(19.4%)、「本人の意思を無視しても臓器の提供を拒否する」9名(7.3%)であった。

表7-b 家族の臓器登録に対する考え  
人(%)

回答項目	1992年 [n = 124]	2002年 [n = 79]
本人の意思を尊重し 臓器の提供に応じる	89 (71.8)	42 (53.2)
本人の意思を無視して 臓器の提供を拒否する	9 (7.3)	17 (21.5)
わからない	24 (19.4)	15 (19.0)
その他	2 (1.6)	5 (6.3)
計	124 (100)	79 (100)

## 考察

1992年に脳死臨調の答申が出され、その後、国会では幾度か「臓器移植法」が審議され、また、廃案となっている。1996年9月28日の日本経済新聞の“サイエンスアイ”は、1994年に国会に提出された臓器移植法案が実質的な審議のないまま廃案になったことを受け「死の概念、論議なく 国会の怠慢、医療にも責任」というタイトルで、国会議員が法案を審議しないまま廃案としたのは「死の概念」という重い内容を論議することに国会議員が耐えられなかったのではないかと、また、日本社会に深くしみ込んでいる医師・医療への不信が、法案の審議に心理的なブレーキをかけたのではないかとという署名記事を掲載している<sup>1)</sup>。それから8ヶ月後の1997年ようやく臓器移植法案が国会で可決したのだが、廃案から可決されるまでの間で、果たして「死の概念」などが論議され、医療の不信感が払拭されたのであろうか。また、一般の人たちの脳死や臓器移植に対する意識に変化があったのだろうか。

平山は死に関する研究を行うことの難しさについて以下のように述べている。『第1に、死を三人称、すなわち「それ」として扱うとき、死はたんなる

“もの”にすぎない。第2に、死を二人称としてあつかう立場がある。この場合、死を「われ」と「なんじ」との関係においてとらえる。第3に、死を一人称としてあつかう立場がある。』<sup>5)</sup>平山が述べているのは、その人との関係性によって死に関するとらえ方が異なることを示しているのだが、そこに意識調査の難しさがある。

この度の調査は対象は異なるが看護学生を対象としたものである。「脳死に関する関心度」「脳死に対する考え」「臓器移植」などに対する意識調査結果を、1992年及び2002年の結果をまず概要し、考察したい。

### 1) 身近な人の死の体験と脳死への関心

家族や友人など身近な人の死を体験した学生は68名(87%)であった。1992年度の調査では124名中98名(79.0%)で、2002年度の調査では8%の増が見られた。しかし、脳死に対する関心度を見ると1992年度の調査では「大いに関心がある」「関心がある」の合計が119名(96.0%)で2002年度の72名(91.1%)を上回っていた。この結果から、脳死に対する関心は身近な人の死という体験ではなく、むしろ、他の要因によるものであると考えられる。

また、看護学生の脳死に対する関心度は1992年度、2002年度共に「大いに関心がある」「関心がある」の合計が90%を超えていることから非常に高いといえる。

「関心をもった理由」については2002年度は「新聞やテレビで話題だから」が39名(29.3%)、「将来脳死患者に遭遇する可能性があるから」が31名(23.3%)で1992年度の81名(68.1%)と86名(72.2%)を大きく下回っている。これは1992年当時の学生の意識は、新聞・テレビ・週刊誌などが「脳死」関連の記事を多く取り扱っていたこと、また、講義やゼミなどにおいても脳死が論じられていたことに影響されていたことが伺える。

また、2002年度は新たに「脳死について家族と話し合う」を選択肢に加えたのだが、関心を持つ学生のうち32名(24.1%)が「話し合う」を選択しており、「脳死」について具体的な行動をとっていることがわかった。この結果は、関心が更に深まり、脳死を単に三人称でとらえるレベルよりも高い意識であることを示していると思われる。

## 2) 脳死は人の死か

1992年度、2002年度の調査で共通しているのは脳死を「生と死の間」ととらえている学生が多いことである。1992年度は43名(34.7%)、2002年度は27名(34.2%)で変化が見られない。「生きている人だと思ふ」についてほとんど変化が見られなかった。「わからない」は1992年度26名(21.0%)であったのだが2002年度は28名(35.4%)と上昇している。また、「人の死だと思ふ」は1992年度は36名(29.0%)であったが2002年度16名(20.3%)であり、これまで20例の脳死臓器移植が施行され、その事実が大々的に報道されているにも関わらず学生の脳死に対する考えには影響を及ぼしていないことが伺えた。

脳死に対する考えの理由について、2002年度の特徴として25名(24%)の学生が「何となく」を選択していることである。その反面、「新聞記事やアンケート結果を読んで」と「本や雑誌を読んで」を選択した者は1992年度計56名(45.2%)、2002年度46名(45.2%)と変化は見られないが、脳死について積極的に考え、行動している学生がいる一方で、「何となく」という曖昧なままで過ごしている学生も少なくない。脳死の問題だけではなく、学習の過程で学生の抱く問題意識と行動には大きな差異が生じているのではないと思われる。

また、2002年度の調査結果について脳死に対する考えと理由をクロス集計した結果(表8)「人の死」「生と死の間」「わからない」を選択した学生は自ら新聞、雑誌、本を読んだ上で脳死について考えていることがわかった。さまざまな情報を得ても、脳死は人の死と考えている学生は12名であり、また、生と死の間と考えている学生は13名である。米本は日本人の行動規範の三重構造について「毎年のように

変わる風俗のようなもの。十年、二十年の単位でゆっくり変わるもの。生と死に対する思いのように、世代から世代へと受けつがれ、世紀単位の大きな間隔をとってはじめてその変遷が意識されるようなもの」とし<sup>6)</sup>、それぞれ流行語、性モラル、死生観を例にあげている。2002年度の調査で看護学生の脳死に対する意識はほとんど変化しないことがわかった。米本が述べているように、死生観、死に対する意識は10年という期間では変化するものではなく、世紀単位の大きな間隔をとってはじめてその変遷が意識されるものなのだろう。

## 3) 脳死患者へのケア

脳死が人の死であると心情的にも明確に区別できるのであれば、多分、脳死患者へのケアは不要となるであろう。しかし、「体温があるのだから生きている人と同じようにケアしたい」が47名(59.5%)という回答結果であった。また、「事務的にケアしたい」や「死者なのだからケアの必要性はない」を選択した学生は全くいないことから、「脳死は死である」と回答した学生であっても、「脳死=死」であることを割り切って考えているとはいえない。筆者らは1991年に156名の看護学生と助産婦学生を対象に、1992年と同様に脳死や脳死患者へのケアなどについて調査を実施したのだが、結果は「体温があるのだから生きている人と同じようにケアしたい」を選択した者は98名(62.8%)で「言葉などで訴えられないのだから丁寧にケアしたい」53名(34.0%)であった<sup>7)</sup>。

また、2002年度の調査では脳死は人の死であるを選択した学生であっても、脳死患者に対するケアについて「体温があるのだから」や「丁寧にケアした

表8 脳死に対する考えとその理由(クロス)

回答項目	人					
	脳死臨調の 答申が出さ れたから	新聞やアン ケート結果 を読んで	本や雑誌を 読んで	今は生死に ついて特別 に考えてい ない	講義やゼミ を通して	何となく
人の死だと思ふ	3	7	5	0	2	5
生と死の間	0	9	8	0	6	9
生きている人だと思ふ	0	1	1	0	0	4
わからない	0	7	7	1	3	7
その他	0	0	2	0	0	0
計	3	24	23	1	11	25

表9 脳死に対する考えとケアの方法（クロス）

回答項目	人					
	死者なのだから事務的にケアする	体温もあるのだから生きていると同じようにケアしたい	訴えられないのだから丁寧にケアしたい	できればケアしたくない	死者なのだからケアの必要はない	その他
人の死だと思う	0	14	2	0	0	0
生と死の間	0	14	14	2	0	1
生きている人だと思う	0	3	2	0	0	1
わからない	0	16	9	0	0	5
その他	0	0	1	0	0	1
計	0	47	28	2	0	8

い」を選択しており、学生の意識と考えている行動にずれがあるように思われる。脳死は人の死かどうか「わからない」を選択した学生も「体温があるのだから」「丁寧にケアしたい」を選択している者も少なくない。（表9）また、1991年度の調査においても、脳死は人の死であるを選択した学生（40名）であっても、30名（75%）が「体温があるのだから」を選択していた。これらの結果から看護学生は「脳死は人の死」であるかどうかという視点よりも、「ケアする」という視点から脳死をとらえているのではないかと思われる。脳死は人の死である、と回答しながら、「体温」があるということで、「ケア」したいとする学生の複雑な心理が伺えた。

脳死患者の家族へのケアについては「ショックを受けているだろうからそれを緩和するように接したい」が51名（64.6%）でもっとも多かった。臨床で家族ケアということがいわれて久しい。脳死は交通事故やくも膜下出血など予期せぬ事態の結果として起こることから、家族は相当のショックを受けていることを踏まえ、学生はショックを緩和するように接したいと思っていることが伺える。

#### 4) 脳死臓器移植

2002年7月から8月にかけて総理府が、二十歳以上の男女3000人を対象に行った「臓器移植に関する世論調査」（回答率70%）では、「脳死判定後の臓器提供に対する本人の意思」で「提供したい」は36.0%、「提供したくない」は31.8%で、「提供したい」が初めて「拒否」を上回ったという報道があっ

た<sup>8)</sup>。

中島はドナーカードを持ち臓器提供の意思表示をしている人は推測で4%位ではないかと述べている<sup>9)</sup>。2002年度の調査では15名（19%）の学生が既にドナーカードを持ち、常に携帯しており、また、「登録したい」と思っている学生は21名（26.6%）であることから、看護学生の臓器移植に対する意識は高いといえるのではないかと。

総理府の調査結果ではドナーカードを持たない理由として「臓器移植に抵抗感がある」を選択した人は最も多く、26.6%であった。今回の調査で「その他」を選択した学生の記述内容は「本人の意思があれば」「自分が提供を受ける側であれば提供して欲しい」など臓器移植に対する抵抗感を示すものは皆無であった。また、臨床実習を行う病院でも脳死臓器移植が行われたこと、疾患によっては臓器移植しか治療方法がないものもあることを授業の中で既に学習していることなどから、一般の人たちよりも臓器移植に対する抵抗感は少ないことが考えられる。

ドナーカードを持つ家族が脳死状態になったらどうするかという質問に対しては「本人の意思を尊重し、臓器の提供に応じる」が42名（53.2%）ともっとも多かった。また、「本人の意思は理解できても、臓器の提供には応じられない」や「わからない」を選択した学生も少なくない。それまで客観的に脳死を論じてきた柳田邦男は息子の脳死状態に際し、それをどう受け止めたのかを著書「サクリファイス」で述べている。『私は、緊急事態に直面したときにパニックに陥らないようにするために、かねて科学

知識によって自分をコントロールするという試みをいろいろと実践してきた。-略-しかし、私を襲ったのは、不遜に対する天罰であろうか、ガン宣告ではなく、息子が植物状態か悪くすれば脳死に陥るかもしれないという事態だった。《さあどうするのか》という自問自答の声が頭のなかで響いた。しかし、こういう場合に自分をコントロールするとはどういうことなのか、つかみどころがなかった』<sup>10)</sup>、『私は長いこと脳死のことをわかったつもりでいた。ところが、こころの病から自死をはかった二十五歳の次男洋二郎が脳死に陥り、やがて天に翔けるまでの一部始終を見つめるうちに、脳死とは何なのかがわからなくなった』<sup>11)</sup>と述べている。また、「脳死の人」の著者である森岡正博は「生命学に何ができるか」の中で『私の「脳死の人」を読んで、私に講演を依頼してきた二十七歳の医学生が、その三年後にヘルペス脳炎が原因で脳死の人となり、死んでしまった。私はその事実を、どう受け止めればいいのか、まったく分からなかった』<sup>12)</sup>と述べている。柳田や森岡の体験はまさしく「三人称」であった脳死問題が「二人称」の問題となったことを示している。学生の脳死や臓器移植に対する意識は高いものの「家族の脳死状態や臓器移植」に関しては現実場面では変化していくことが十分予測できる。

大林は1991年に脳死臨調公聴会を傍聴した経験を『今も変わらぬ、臓器移植医療の市民の意識が表れていると考え、再録した。ここに示された市民サイドの意見に対して、社会全体として対応してきたか、臓器移植法施行後の脳死状態からの臓器移植が行われた今でも、改めて反省してみることが大事である』

## 引用文献

- 1) 中島みち：「脳死と臓器移植法」文春新書、p16、平成12年
- 2) 日本臓器移植ネットワーク：<http://www.jotnw.or.jp/datafile/index.html> の「脳死での臓器提供」
- 3) 真部昌子・小濱優子他：「脳死及び臓器移植に対する看護・保育・英文科学学生の意識-臓器移植と登録に対する態度と関連するアンケート調査から-」、埼玉県立衛生短大紀要第18号71~78、1993
- 4) 中島彰：サイエンスアイ「死の概念、論議なく 国会の怠慢、医療にも責任」日本経済新聞、1996年9月28日朝刊
- 5) 平山正実：「死生学とはなにか」日本評論社、p17~18、1991年
- 6) 米本昌平：「バイオエシックス」講談社現代新書、p212~213、1985年
- 7) 真部昌子、小濱優子他：「ケアする立場から“脳死”をどのように考えるか -看護学生の意識調査から」プレインナーシングVol 8 No 5、p87~93、1992
- 8) [内閣府世論調査 脳死判定後 臓器「提供」、拒否上回る カード認知率は低下] 日本経済新聞、2002年10月6日
- 9) 前掲1)、p20~22

と述べている<sup>13)</sup>。今後はES細胞の利用などで臓器移植は必要なくなる時代が到来するかもしれないが、2002年度の調査を実施してみて、あらためて脳死臓器移植は過去の問題ではなく、現在の問題であるということがわかった。

## 結 語

1992年、2002年に看護学生に対し「脳死、臓器移植」などに関する意識調査を実施した。その結果、両年共に看護学生の脳死や臓器移植に関する意識は高く、能動的に新聞や書籍などから情報を得ていることがわかった。また、2002年度の調査では、80名中15名の学生が既にドナーカードを持ち、それを携帯していることがわかった。しかし、現時点で学生は脳死を三人称でとらえており、脳死患者のケアに関しては、脳死は人の死であるとしながらも「体温があるのだから生きている人と同じようにケアしたい」を選択している学生が多いなど、客観的に脳死を死ととらえられていないと思われる回答もあった。これは看護学生は脳死患者をケアする立場からとらえているためと思われる。脳死患者からの臓器移植はまだ20例しか行われていないことから、今後の課題としては、看護教育のなかで“人称”を明確にした上で「脳死」や「生病死」について考えさせることが必要だと思われる。

## 研究の限界

1992年当時の看護学生に同じアンケート調査を実施しているわけではないので、10年間の意識の変遷をたどることはできない。また、対象が80名と少ないことから、結果を一般化することはできない。

- 10) 柳田邦男：「サクリファイス わが息子・脳死の11日間」文芸春秋社、p38～39、1995年
- 11) 前掲9)、p197
- 12) 森岡正博：「生命学に何ができるか 脳死・フェミニズム・優生思想」勁草書房、p4、2001年
- 13) 大林雅之：「バイオエシックス教育のために」メディカ出版、p44、1999

#### 参考文献

- 1) 梅原猛他：脳死は「人の死」ではない、朝日ジャーナル、1991年6月28日号、p23～29
- 2) 武田純三他：「2例目の脳死からの臓器移植 慶応大学病院の経験」、看護管理、医学書院、1999 Vol.9 No.12 p914～925
- 3) 山崎美子：「脳死からの臓器提供手術 高知赤十字病院の場合」看護管理、医学書院、1999 Vol.9 No.12 p926～930
- 4) 森岡正博：「脳死の人 生命学の視点から」 福武文庫、1991